

2017年

11月10日

第308号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地 1

〒884-0102 Tel 0983-32-2025

友愛を四海に布(し)かんのみ

園長 児嶋草次郎

胸騒ぎがしたとは言え、あの時医師は1年間くらいはかかると言った。絶望的とは言わなかった。医師は婉曲(えんきょく)に1年くらいの命と言ったつもりだったのかもしれないが、本人はもちろん私たちは、半年か1年くらいすれば大学にもどれるのだろうと解釈したし、信じた。ある公的機関に支援策を職員が相談したら、大学生のままでは難しいという返事だった。そこで10月の「友愛通信」に彼女の事を書いて、支援の和・輪を作っていこうと考えた。親から縁を切られた立場であり、天涯孤独と言ってよい身の上であるし、私たちにできることは、恐怖と不安におののいているであろう入院中の彼女を励まし支え、これから長期間、その病気と戦っていけるだけの軍資金を準備していくこと。

二回三回と皆様に支援を呼びかけていくつもりだった。通信を読み病名を知ったある職員は、大阪に専門病院があるので、そちらに転院させた方がよいとも助言してくれ、すぐに、手紙を書き始めた時だった。また、さっそく10万円を治療費にと送ってくださった方もいた。

様態急変の知らせが入ったのは、10月27日午前9時半すぎでした。土・日雨続きで1か月ほど遅れてしまった牧草の種まきをするため、トラクターで畑を耕耘していた時、妻の浩子が軽自動車ですら知らせに来てくれました。こんな動揺は私の人生で次男の死の時以来二度目です。想定していなかったことであり、園に帰りつくまでの5分ほどの間に色んなことを考えねばなりませんでした。

彼女は、園に6年間在籍したとは言え、3月に卒園(措置解除)し、法律的なつながりは切れており、私たちに権限は何もない。入院時、保証人にはなったけど、アフターケアをする立場としての支援だった。危篤状態に陥っているこの状況においてまず知らせるべき所は、親。しかし、在園時、連絡を取ることを禁止され、彼女が一番恐れていた御両親に連絡することで、どのような事態となるのか全く予想できない。家を出された後、一時期お世話になっていたU氏に連絡してみる以外ない。彼女が入院してから、U氏に一応報告しようと提案して来た

けど、彼女は気が進まないようだった。しかし、もう躊躇している時ではない。

事務所に帰るとすぐに U 氏のケータイに電話し、御両親への連絡もたのみました。そして、車で延岡の県病院に向かいました。浩子と栄養士の鍛治田さんが同乗してくれました。私より先に彼女を 5 年間担当しお世話して来た岩村保母が向かったということでした。小規模児童養護施設で彼女を母親代りとして姉として指導したのは、岩村保母です。入院してから、自分の休日も使いながらずっと支え続けて来ています。

高速道を運転しながら、次男のあの時の死のことを思い出していました。否応無く記憶に浮びあがって来ます。あの時小林方面に向かいながら、車椅子姿の次男をイメージしたりしましたが、現実には、あまりにも冷酷でした。今回は覚悟を決めて病院に入らねばなりません。高速道から見える空も海も台風接近の影響もあってか、鉛色でどんよりしていました。心もどんどん沈んでいきました。

病院では最悪の現実が待ち構えていました。すでに岩村保母は到着していて、臨終に立ち合うことができたということでした。またもやむごい仕打ちです。一体彼女が何をしたというのでしょうか！悔し涙が出ました。

悲しんでばかりはおれず、すぐに U 氏にケータイで彼女の死を伝えました。運命なのでしょうか、ちょうど U 氏は出張で関西におられ、彼女の家に向かったださっており、両親に状況を知らせ交渉して下さったのです。その結果として、遺体は引き取れない、葬儀にも来れないという返事でした。私が腹をくくるしかありません。「全てを背負う」と決意。そして、すべてを委任する内容の手書きの文書を印鑑付きで送るように、U 氏に依頼してもらいました。U 氏は心よく引き受けてくださり、間もなく、友愛社にまずはファックスが届きました。これで動けます。

次に連絡したのが九州保健福祉大学教授山崎きよ子先生と、「友愛バンド」のリーダーである大学 3 年生のアキヒコ君へでした。山崎先生には次男の時からお世話になっています。延岡に向かう途中にケータイを一度握ったのですが、止めました。山崎先生とアキヒコ君の動揺を想像すると、私自信が耐えられなく可能性があったからです。

山崎先生は秋葉敏夫先生と一緒にすぐに病院にかけつけてくださいました。アキヒコ君から連絡をしてくれて、「友愛バンド」のメンバーたちもすぐに集まってくれました。

それから時は一刻も止まってくれませんでした。仮通夜と通夜と二晩、「友愛バンド」のメンバーたちが、ずっと遺体に付き添ってくれました。そして無事に葬儀を終えることができました。通夜、葬儀は高鍋町の「あおい会館」で行いま

したが、それぞれ石井記念友愛社・友愛園の子供たち・職員たち、中・高時代の学友・先生方、大学の学友・先生方、約400名ほどが参列してくださいました。彼女の尊厳に見合った、りっぱな葬儀でした。

あれから少し時がたち、この原稿は、熊本市内のホテルの中で書いています。11月4日から一泊二日で友愛園の中・高生たちと一緒に「小楠旅行」に来ているのです。横井小楠の志を学ぶ旅です。昨年4月熊本地震で多くの方が亡くなりました。昨日訪れた小楠の私塾「四時軒」も倒壊したそうで、家はなくなっていました。

その後に行った「徳富記念館」の職員が紹介してくださった、小楠の詩をここに転記します。これは、甥（おい）の横井左平太・大平がアメリカ留学する時に送った言葉だったと思います。

堯舜（ぎょうしゅん）・孔子の道を明らかにし 西洋器械の術を尽くし  
なんぞ富国に止まらん なんぞ強兵に止まらん  
大義を四海に布かんのみ  
心に逆らふこと有るも 人を尤（とが）むる勿（なか）れ  
人を尤（とが）むれば徳を損う 為さんと欲する所有るも  
心に正（あて）にする勿れ 心に正にすれば事を破る  
君子の道は身を脩むるに在り

徳富記念館の職員は、和魂洋才だと説明されました。大事なところを私なりに解説するならば、当時、西洋列強がアジア諸国の植民地化に競い合っていた時代、小楠は甥に次のように呼びかけたわけです。

西洋の文明を学ぶことは大事だ。しかし、国を豊かにするだけに、軍隊を強くするだけにとどまってはだめだ。論語や大学等で学んだ東洋の大義（友愛社の私たちへはこれを友愛と置き換えることもできるでしょう）を四海、つまり世界に「布かん」、つまり広めていこうじゃないか。

11月5日、朝6時半、外に出て散歩すると、太陽がまぶしく輝き、青い空には雲一つなく、西の山の峰の上には満月がまだ沈まず待っててくれました。彼女の志しは、友愛園の子供たちが、「友愛バンド」の同志たちが引き継いでくれることでしょう。そう感じながらホテルにもどりました。

（以下は葬儀の時の挨拶です。彼女の尊厳を犯さないために、実名で書きます。）

皆様、今日は桂遥奈さんの葬儀に御参列下さりまして、ありがとうございます。まず初めに申し上げなければならないことは、ここに遥奈さんの家族・親族は

だれ一人参列してないということです。そのことで、遥奈さんが今まで背負わされて来た荷物の重さ、複雑さについて御察しいただければと思います。

私、石井記念友愛社の園長であります児嶋が、家族・親族に代り、喪主を務めさせていただいています。遥奈さんはもともと関西方面で生まれ育っております。家庭的な事情があってここに来たのは、中学1年生の時でありました。その頃の彼女は心に傷を負っており、自信を喪失しており、人間に対する信頼もあやういものでした。

石井記念友愛園の小規模児童養護施設じゅうじの家で生活を重ねる中で、職員たちに愛され、回りの子供たちとも兄弟関係・人間関係を学び直し、徐々に人間性を取りもどしていきました。本来彼女が持っていたであろう明るさやがんばる気持ちを発揮するようになりました。学校でも友人たちに恵まれました。高鍋東中学校、高鍋高校と進みましたが、特に高鍋高校時代は、ボート部に所属し、心身ともに鍛えられ、大きな自信を身につけました。そして大学進学を志すようになりました。今まで関わって下さった多くの生徒の皆さん、それに先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

この4月よりは、延岡の九州保健福祉大学に通い始め、社会福祉への道を志しておりました。やはり先生方、学友に恵まれ、はりきって学んでおりました。今日の遺影のように光かがやいていました。

ところが、8月の後半より体調を崩して延岡県立病院に入院。特殊なウイルスによる感染症でありました。いっこうに良くなりえず、抗ガン剤治療の始まった2日目、10月27日、午前10時50分頃、急変して亡くなりました。

志半ばでたおれてしまい、彼女も無念だと思います。私たちも残念でなりません。難病だとは聞かされていましたが、1年くらいは覚悟しなければならないとも説明を受けております。こんなに早く逝ってしまうなんて全く予想もしていませんでした。

一昨日亡くなってから、遥奈さんの死の意味をずっと考えてきました。天国に行った彼女が私たちに何を伝えようとしているのか、ずっと考えています。このことについては、これから彼女の後に続く友愛園の子供たち、彼女に関わって来た職員たちが一番考えなければならないことです。

仮通夜の時にも子供たちに話したのですが、命のはかなさ、大切さを身をもって私たちに示してくれました。それぞれがわが身を大切にすることを学ばねばなりません。生と死の間は紙一重です。

もう一つは、彼女は抱いていた志を、同輩・後輩たちが受け継いでほしいと願っていると思います。特に、友愛園の子供たち一人ひとりが、彼女が持っていた、

大学を卒業して、世のため人のために働くという志の一部をしっかりと受け継ぎ自分の夢・志に重ねてがんばらねばなりません。桑原牧師も遥奈さんの心を心に受け止めていけば、遥奈さんの心は生き続けるとおっしゃいました。

遥奈さんの死を悲しむだけでは、遥奈さんに対して失礼なことになると思います。彼女の思いにむくいることにはなりません。彼女の志をキチンと受け止めて、それを踏み台にして、前進することが大事だと思います。それが彼女の思いに答えることだと思います。彼女の心は生き続けることができます。友愛園の職員・子供たち、それにここに参列している若い方々、よろしくお願い致します。

一昨日の夜は、石井記念友愛社内の静養館の、石井十次臨終の間に遥奈さんの遺体を安置しました。そして同じく大学に学ぶ「友愛バンド」の同志たちが一夜見守りました。おそらく遥奈さんの魂は石井十次のもとに行き、自分の今までの使命について報告したことと思います。石井十次もうなずいたことでしょう。

この宮崎・高鍋に来て今まで6年半ほど多くの皆様に愛され守られ、またこうして、多くの皆様に見送りに来ていただくことができ、遥奈さんは、ずっと背負って来た負の荷物から解放されて、感謝の気持ちで旅立つことができたと思います。

本日は、お忙しい中、遥奈さんの葬儀に参列していただき、ありがとうございました。